

土居拓務会員の高山植物（レブンアツモリソウ）講座「礼文の花と観光」

平成30年10月16日（火曜）、土居拓務会員（林野庁北海道森林管理局宗谷森林管理署森林官（礼文担当区））（以下、土居森林官。）による高山植物（レブンアツモリソウ）に関する講座「礼文の花と観光」が開かれました。北海道礼文郡礼文町にある礼文小学校の5学年、6学年の合計12名が対象です。高山植物を保護するべきか、観光資源として活用するべきか、両立させるにはどうすればいいかなどの“答えのない問題”について小学生に議論させ、地域資源への関心を高めることが狙いです。

「花の浮島」の別名を持ち、300種類以上の植物が咲き乱れる礼文島ならではの講座かと思えます。多くある高山植物の中でもレブンアツモリソウは「種の保存法」によって、平成6年に特定国内希少野生動植物種に指定された希少植物です。講座ではレブンアツモリソウを話の中心に挙げ、自作の紙芝居「レブンアツモリソウ物語」（昔は多く自生していたこと、盗掘や自生地が踏み荒らされ数を減らしたこと、盗掘や自生地の踏み荒らしが減少した現在も自然現象が続いていることなど）を読み聞かせました。

講義の後、小学生が感想と「今後、レブンアツモリソウをどう扱うか」についての意見を述べました。多くの小学生が現在の自然現象を問題視し、増殖させることに関心が向いていると分かりました。質問も多く投げかけられ、「森林官は礼文島に一人しか配置されないこと」「森林官の楽しみは国有林を歩いて観察すること」など、様々な情報交換がなされました。

最後に土居森林官は「希少植物の保護と利用を両立させるのは難しい。答えがない問題だからこそ、関心を持って考え続けて欲しい。希少植物を有効活用しつつ次世代につなぐ努力を惜しまないで欲しい」と小学生に気持ちを伝えて講義を終えました。

事後アンケートの結果、12名中12名（100%）が「植物に関心を持った」と回答しました。土居森林官は「この後もアンケート結果をさらに分析して、関心を高めやすい環境教育の方法について考察したい」と話しました。

林野庁は林学を中心に理科系の職員が9割以上だそうです。そのため、林学系の仕事に就いて8年目になる現在も日々の勉強が欠かせないと言います。「今現在、実務で経済学が活かされることは少ない。ただ、どこかで必ず活きると思うので、今後も経済学的な視点や考え方は大事にしていきたい」と取材でも話をしていました。

